

# 海外派遣実績報告書

所属：比較文化学専攻

氏名：八木百合子

海外派遣先国名：ペルー共和国

海外派遣先大学名：国立クスコ大学（サン・アントニオ・デ・アバッド大学）

海外派遣期間：2008年7月15日～2008年10月1日

## 海外派遣先大学について

1692年に創設された国立クスコ大学（正式名称：国立クスコ・サン・アントニオ・デ・アバッド大学）は、リマの国立サン・マルコス大学に次いでペルーでは2番目に古い歴史を持つ国立大学である。現在21の学部と34の専攻科をもち、社会科学部には、人類学、考古学、歴史学の3つの専攻科がある。



国立クスコ大学（社会科学部校舎）

クスコ大学があるクスコ市は、かつてインカ帝国の首都として栄えた地であり、インカ時代の考古学的遺跡や植民地時代に建設されたキリスト教の教会が数多くあ

る。こうした歴史・文化的都市に置かれたクスコ大学では、考古学や歴史学の研究も盛んに行われてきた。市内中心地には大学附属のインカ考古学博物館を持つほか、大学の図書館にはクスコ古文書館が設置されている。古文書館には、植民地時代の行政および教会資料をはじめ、クスコ地方の歴史に関する膨大な記録が残されている。

## 海外派遣前の準備

派遣先大学の教員とは以前から親交があったので、海外派遣追加募集が発表された4月下旬に今回の派遣に関してメールや電話で連絡をとり、受入れの許可や派遣後の予定について調整した。派遣についてクスコ大学に打診したのは4月であったが、その後の連絡で、5月から6月にかけて大学が昨年からのストの振替休暇に入るとの話だった。ペルーの国立大学は教員によるストライキが多く、昨年あったストライキの影響で、今年は夏季休業予定がずれこみ、年間暦とは異なる期間が休業になってしまっていた。この知らせをうけて、授業が再開され、図書館などの施設が確実に利用できる7月以降に渡航する計画をすすめた。

派遣決定から渡航までの2ヶ月の間には、調査や滞在のための準備を行った。今回、文献収集を予定していたので、図書館や古文書館の利用申請に必要な書類に関して現地の友人に問い合わせ、事前に準備できるものは日本で揃えておいた。またこれまでの調査成果を簡単にまとめたものと村で撮った写真を報告書の形にして用意し、現地の人に提示できるようにした。

クスコでの滞在に関しては、クスコ市内にあるカトリックの修道会付のNGOの宿舎に宿泊を要請した。このNGOは、イタリア人によって運営されており、私が調査を行ってきたアプリマック県南部の農村地域で活動しているため、以前からも調査の際にはお世話になっていた。私の滞在に関しては、事前に責任者やコーディネーターとメールで連絡をとり許可を得た。また、調査計画を早めに立てて知らせておいたので、調査地への移動や荷物運搬のために彼らの車をアレンジしてもらえるなど、調査についてもさまざまな面で協力を得ることができた。

## 海外派遣中の勉強・研究

派遣期間中は、これまで調査を続けてきた村の聖人信仰の変容過程を明らかにするために、文献調査と民族学調査を行った。

### 【文献調査】

文献調査ではまず、クスコ大学付属のクスコ古文書館で、20世紀前半の村に関する民族誌資料を収集した。また、教会関係の資料を探するために、クスコ大司教座文書館を利用した。ここでは、19世紀前半の調査村の教会に関する貴重な資料を入手することができた。クスコにある資料の所在に関してはおよその検討がついていたため、多くの時間をかけることなく収集作業が進んだ。資料収集に関しては、クスコ大学だけでなくクスコのアグスティヌス修道会の司祭や文化庁の建築家および歴史家にも便宜をはかってもらった。

またリマでは、サンタ・ロサに関する教会関係の資料を探するために、リマ大司教座文書館とカトリック大学附属リバ・アグエロ研究所の図書館の利用許可をとったが、リマ滞在期間が短かったため、検索文献の一部のみの閲覧にとどまった。ただ、今回は知り合いの紹介により、どの文書館でも利用許可をすぐにとることができたのは幸運だった。

### 【民族学調査】

8月には私がこれまで調査してきた村を再度訪れ、補足的な民族学調査を約1ヵ月にわたり行った。村では8月に2つの祭りが行われるため、その時期に合わせて出発し、翌年の祭りの予定を決める村集会までの期間調査を行った。調査では特に、これまで祭りを主催してきた人たちに対して重点的に聞き取り調査を行った。

今回の調査では、たまたまクスコ大学の人類学専攻の学生のなかに、私が調査してきた農村および隣村で今年から調査を始めた女子学生がいたため、期間中彼女と村での滞在をともにすることになった。そのおかげで、彼女と情報交換したり、調査に関しても相談にのってもらったり、村滞在期間を有意義に過ごすことができた。

最後にリマで、村の祭りを継承してきたリマの移住者委員会の関係者を訪問し、祭礼や組織運営に関してインタビューを行った。

調査に際しては、受入教員やその他の現地研究者からさまざまな助言をもらった。



村祭りの聖像行列（8月30日）



村祭りに登場する踊り「マユラ」



祭りの日に行われる闘牛



祭りの主催者（カピタン）

## 海外派遣中に行った勉強・研究以外の活動

研究以外では、空いた時間や移動時間を利用して、クスコ周辺の有名な祭りを観に出かけた。いずれの祭りも私の研究テーマと重なる部分があり、非常に興味深かった。

7月末には、村落調査に向かう際に、アプリアック県のチャルワンカ村で「セニョール・デ・アニマス」という祭りを観た。ペルーでは、各地で「セニョール・デ・〇〇」つまり、「〇〇のキリスト」といって、キリストを祀った祭りが行われるが、この村のアニマスのキリスト像は特殊で、キリストの頭の部分だけを聖像として祀っている。この信仰は、村での共同農作業の際に、畑からキリストの頭が出現したことに始まる。現在、キリストの頭が発見された場所には、新たな大聖堂が



セニョール・デ・アニマスの聖像

村人の手によって建設中であり、今年はその上棟式とともに盛大な聖人祭が行われ、各地から大勢の人が訪れていた。

また9月にクスコに戻ってからは、アルムデナというクスコ市最大の墓地に付属する教会で行われた聖母の誕生を祝う祭りを観た。祭りの当日は、アルマス広場の大聖堂からアルムデナの教会まで聖人行列が行われ、聖母像の後に続いて信徒集団による楽団や20以上の踊りのグループも参列した。クスコ出身者による踊りのグループだけでなく、隣のプーノ県出身者のグループの参加も多数みられた。

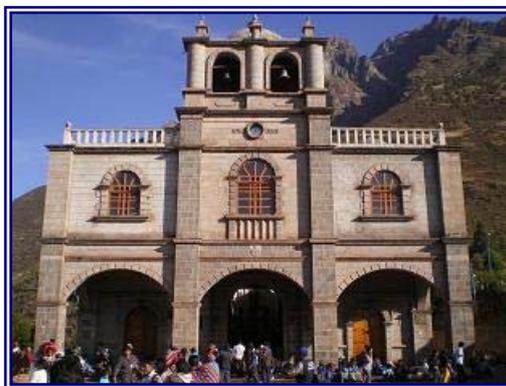


アルムデナの聖母の祭り



プーノ県出身者による踊りのグループ

最後にクスコ有数の巡礼地「セニョール・デ・ワンカ」を訪れた。ワンカの聖地にある



セニョール・デ・ワンカの教会

教会では、岩に描かれたキリストの像が崇拝されている。この聖地に伝わる伝承では、1674年に、鉱山から逃げ出してきたインディオが村に帰る途中、鞭打たれ血を流す男（キリスト）が岩に表れたことから、その奇跡の起こった場所に教会を建て、その姿を描いて崇拝している。この教会には、1年を通じて数多くの人たちが訪れるが、なかでもワンカのキリストの祝祭が行われる9月14日は、多くの人がクスコからだけでなく、近隣の県などからも訪れ、周辺は

巡礼者を乗せたトラックやバスで大混雑する。私が訪れた日も山の上にある教会へと続く道は徒歩で巡礼する人たちでいっぱいであった。ワンカは治療の神としても知られており、聖

地にある泉では健康を願って水浴びする人もいた。

### 海外派遣費用について

派遣費用の大半を占めたのは、移動にかかる費用だった。今年は世界的な原油高により、航空運賃のみならず、ペルー国内のタクシーやバスの料金なども値上がりしていたため、移動費が予想以上にかかった。生活費に関しては、宿泊費はほぼ定額だが、食費は店を選んだり自炊をしたりすることで予算内に収まるよう調節した。物価は日本と比べるとペルーのほうが断然安い、インフレの影響で食料品や生活雑貨類の価格が前年よりも上昇していた。

日本からペルーへはアメリカドルを持ち込んだが、今年は現地通貨に対するドルのレートがかなり落ちていたため、現地生活に必要な資金を両替するのに不都合な状態が続いた。

### 海外派遣先での語学状況

ペルーでは常時スペイン語を話すこととなったが、語学に関しては、大学時代にはスペイン語を専攻しており、これまでも調査・研究のために何度もペルーを訪れていたため、現地での生活や研究生活には全く支障はなかった。ただ、村落調査に出かけた際には、先住民言語であるケチュア語を使用しなければならない機会もあり、スペイン語と比べると私のケチュア語の理解能力は低いため、現地の友人に通訳をお願いしなければならないこともあった。

### 海外派遣先で困ったこと

南半球に位置するペルーは気候が日本とはまったく逆で、派遣期間であった7月から8月の時期は、ペルーでは真冬にあたる。以前からもペルーへは調査のために訪れてはいたが、7月に日本を発ったことはなく、真夏の日本から真冬のペルーに渡航したのは今回が初めてであった。そのため、到着してからは体調管理に苦労した。また、滞在先のクスコは標高が3400メートル近くあり、昼夜の寒暖の差が激しいため、滞在中は風邪などひかぬよう常に健康管理に気を配っていた。今回はクスコ到着後一週間くらいは14時間の時差によるボケに加えて、気候の逆転、高山病の3つに同時に悩まされた。経験上、これらは慣れ、つまり時間が解決する問題であるため、休息時間を交えながら研究計画を立てていく必要がある、無理は禁物である。

### 海外派遣を希望する後輩へアドバイス

総研大の地域文化および比較文化に所属する学生は、1年以上の長期フィールド・ワークを行うのが通例である。そうした「長期」の調査を希望する学生にとって、この派遣期間は必ずしも十分であるとはいえないかもしれないが、長期調査を終えた学生の補足調査あるいは調査前の予備調査には適していると思われる。私自身は今回、長期の調査を終えた後の補足の調査を行うためにこの派遣を利用したが、不足するデータを収集するだけでなく、ある程度博士論文が形になってきた段階で、現地の研究者から今後の研究につながるさまざまなアドバイスを受けることができた。また、調査前の人も海外の研究機関を利用することで、現地の研究者に相談しながら、現地に関する情報や調査に必要な文献資料の入手が可能になるというメリットもある。いずれにせよ、海外の研究者との交流を深めることは、研究者としての視野を広げ、国際的な場で活動していく礎を築くためにも非常に有意義である。